

演 題 名 ご入居から看取りまで。その人らしい心豊かな人生を。

施 設 名 ライフケアガーデン湘南

発 表 者 石田 典子

概 要

【はじめに】

強い介護拒否状態から、観察の手法見直し、ケアの統一化、薬剤調整等により、生活環境に対しての不安が減少し、結果として日常生活に輝きを取り戻し、その後お看取りとなった症例を発表します。

【症例紹介】

I氏(81歳) 男性 介護2

既往歴:アルツハイマー型認知症、前立腺肥大症、神経因性膀胱、膀胱がん、肝機能障害、胃がん(全摘)。

平成27年7月に熱中症により市内一般病院へ入院。以前よりご家族(奥様)は入居施設を検討されていたがご本人の拒否が強く入居には至っていない。

入院中は熱中症の治療に加え、各種投薬の影響か意識混濁が見受けられた。

在宅主治医がご家族へ当施設の概要を説明され、退院日(8月8日)にそのまま病院から直接ご入居される事となった。

入居初日より、想定以上に帰宅願望が強く、大声で繰り返し叫ぶ、車椅子からの立ち上がりや不安定な立位が多いなど、常にスタッフ付添いが必要な状態であった。食事、入浴への拒否も強く、職員への拒否行動も目立った。この様子を見たご家族は涙を流しながら「ご迷惑をお掛けしてすみません」と職員に頭を下げられる状況であった。

【治療(ケア)計画】

目標:ご本人とスタッフとの関係を築き、笑顔を見出す。本人・ご家族が心豊かな人生を送ることができる環境を提供するため、介護拒否やご家族への寂しさを解消できる生活環境を整える。ガンの進行から余命は長くなく、ご家族の要望から投薬は限りなく減らすこととした。

【経過】

○8月にご入居。立位、歩行不安定の為、行動把握にてフットセンサーを設置。センサー反応時は居室に伺い安全確認を行うも『はいって来るな』と激しく興奮される。終日頻りに離床され、3分に1回以

上のペースでセンサーが反応し、排泄記録簿は真っ黒になった。精神安定を最優先としセンサー反応時は居室に入らず、ドアのすき間から遠めに観察することを徹底し共有した。

○提供する食事への拒否も強く、9月まで全く摂取されない状態が続く。ご家族が持参された食事のみ召し上がられることから、ご家族へ協力を求め、近い味を追求できないか厨房との連携を強化し、徐々に提供する食事にも口をつけていただくに至った。○主治医へ看護師より進言し、薬剤は最低限のものとし、服薬管理を徹底した。大声・横言に対して薬剤による沈静に頼らず、傾聴を継続することを徹底した。その経緯でバスケットボールの経験があることがわかり、デイルームの目につく箇所に簡易的なバスケットボールのゴールを設置。

お誘いしたところ『ええよ、やろか』と職員と共に何本もシュートを決め、入居1ヶ月を超えてはじめての笑顔を見ることが出来た。

○10月頃より歩行が安定し、散歩などの機会が増え、比例して笑顔も増えた。レクへの参加、レストランでの食事も取れるようになる。

○11月頃よりガンが悪化。12月に家族付き添いでご逝去。

【結果】

拒否行動に対し、適切な距離感と家族との連携、薬剤管理・献立管理まで連携した結果、徐々にであったが、コミュニケーションを深めることが出来た。

その中で敬虔なカトリック信者であることが判明し、12月20日に市内のカトリック系高校である聖園女学院のご好意により、I様の居室にてクリスマスのハンドベルと讃美歌を頂戴する。翌々日12月22日、ご家族立会いの元、ご逝去される。

【考察】

介護、看護が一体となり、責任を持って関わりを持ってた事が本人様とご家族様に笑顔を見出せたと感じます、又地域との交流、関わりで本人様にとって良い最期を迎えて頂けたと感じます。